

国立療養所長島愛生園 1930年（昭和5年）設立①

「滋賀県健康づくり財団」より平成29年度ハンセン氏病問題の現地学習会に本校から学生・教員が参加しその理解を深められました。参加した学生のレポートを紹介します。



ハンセン氏病の歴史は古く、日本最古の歴史書である『日本書紀』にはすでに「らい」という言葉が存在していた。その当時から嫌悪されてきた疾病である。しかし、非人とされながらも癩者の人々の救済活動は、時代によっても様々な苦難の歴史を歩んできたようである。

現在、ハンセン氏病といえば治療薬も開発され過去の病気になりつつある。私自身、ハンセン氏病について知るきっかけは、歴史小説を読んでからである。それには顔が崩れ、目が見えなくなり悪臭を放つ「不治の病」という表現には、大きな衝撃を受けた記憶が想起された。しかし、その主人公は多くの人に慕われ、また不自由となった身を気遣う様子が克明に描かれていた。しかし、私が差別や偏見の実態を知るのは、もっと後である。

今回の学習の機会を戴き、療養所を見学した。実際に目の当たりにした時、自分自身の無関心さが浮き彫りになった。

疾患としてのハンセン氏病の理解だけでなく、なぜそのような症状が出現するのか、当時の衛生状態や栄養状態などの時代背景についても、まず知る必要があった。

また美しい瀬戸内の海に囲まれたこの地は、当事者である患者には何も知らされず、ある人は自ら故郷を捨て「収容棧橋」に立ったのである。彼らの瞳には「収容棧橋」がどのように映ったのか、考えるだけで胸が締め付けられる。国が誤りを認めたのは極、最近である。療養所に収容隔離されてから半世紀以上を経て、余りにも長すぎた。提唱する組織が大きければ大きいほど、誤った認識を回復するのは難しい。

様々な情報が飛び交う中で、私たちは生活している。言われたまま見たまままで認識し、果たしてそれが正しい情報なのか自分たちの問題として決して考えない。差別や偏見は現在においても身近に存在する。自分がその当事者になった時、一体どのように対処すべきなのだろうか。正しい知識と理解はもちろん、まず相手を想う気遣いや優しさはいつの時代にも必要である。

S・S

国立療養所長島愛生園 1930年（昭和5年）設立②

差別や偏見はいつの時代にも払拭しがたい人間の負の認識である。私たち人間は、人を見下し人と比べそして優位に立ちたい生きものである。その対立軸には、人を助けたり救いたい感情も抱く。人格の上では対等な人間であるにも関わらず、障害者にさえ偏見を抱きやすい。社会が障害者への関心を向かわせるには、啓蒙啓発とするきっかけが必要である。なぜなら無関心こそが誤解や偏見を持ちやすいからである。正しい理解のためには、関心をもちその人達が生きた人生に歩み寄る必要がある。

ハンセン氏病は、大阪の中央図書館で歴史や写真が展示されていた。しかし、そこには施設や年号だけであり実際そこで何が起きたのかどのような歴史が繰り広げられたのかまでの情報は得られなかった。今回のように迫害を受けた人達の思いや苦しみ憤りなどの詳細な資料もなかった。一般市民にその実態を正しく伝えるには、迫害を受けた人の声や資料などを提供し、我々はそれに耳を傾けるべきである。

亡くなっても自分の本名を名のれない、故郷に帰れない

など自分がこの世に生きた存在の否定である。患者は家族に配慮し、家族は患者を精神的に葬った。偏見・差別・排除といったトラウマを生涯持って生きること余儀なくされた。国が言うのだから当たり前とされ「無癩県運動」として、一等国の恥という汚点で隔離は始まった。行き場のない患者は、物乞いをし、四天王寺や清水寺に身を寄せた。国民を信じ込ませ誤った認識を植え付け、今日までの長い差別の歴史を生み出したのである。

患者の多くは、現代も後遺症を伴いながら高齢化している。言葉では簡単にいえる。しかし、想像を絶する患者たちの苦悩に満ちた生涯が確かに我が国の歴史に在った。ハンセン氏病の後遺症に苦しむ患者の言葉は生きた証である。既に死亡された方の、メッセージの一つひとつ克明に伝えて下さった。知らないというだけではすまされない罪に胸がつまる思いであった。

R・R

